

概 要

急速な経済成長を遂げたわが国で国民が本当の裕福感を感じていないのは住宅が原因であるとされている。被服、食事など世界のトップレベルというかむしろ飽食の時代とも言われている。しかし住宅に関してはその狭小さ、質等々でまだまだ劣るものである。これは我々日本人が良い住宅を要求する意識に欠けていたのが原因でもある。すなわちこれは欧米人との住意識、住居観の相違によるものとも考えられる。徳川時代が300年も続いたこと、これは武家の支配によるもので、武士は君主の為に死ぬことが最高の道徳であったから良い住宅を求めようとしなかったという説、わが国は仏教国であったので輪廻の思想があり、現在の世界は仮の世の中で、仮の世では良い住宅など求めても仕方が無いと考えたという説などがある。

事実住居教育は中学校、高等学校では、家庭科で行われるが授業数は被服や食物に比べ極端に少ないのが現状である。そもそも家庭科教員に住居を専攻した者が極めて少ない。教科書を見ても住居部分の記述は少なく、これでは教育により国民がより健全な住居観を持つ事は困難である。大学の家政学部系や教育学部系で住居学科があるところもあるが、現状の家庭科教員が被服、食物を専攻した先生方で抑えられてしまっているので住居学科出身の学生が家庭科教員になっても得意としない被服や食物を多くの時間を割いて教えなければならず、これではかなわないとして教職を希望しなくなると言う悪循環をもたらせている。

家庭科教科書も住居部分は根本的に誤った記述があったり、これで本当に真剣な検定が行われたのかと疑問を持たざるを得ないものが多い。家庭科の教員は家庭科が受験科目にないことから受験科目にある教科を担当している教員よりも一段低く見られるという傾向があると言われている。このような誤記のある教科書が出回り教員側からも苦情が出ないと言う点からも一段低く見られると言うのも致し方ないかとも考えられた。教科書の誤記に関しては本学の学生を対象としたアンケート調査の際にも指摘されている。平成7年の8月に本学で平成7年度産業教育指導者養成講座（高等学校・家庭）が開催された。全国から家庭科教員が集まり、筆者が省エネルギー建築、代替エネルギー利用住宅に関する講義を行ったことがある。このような研修会に集まる先生方であるから大変に熱心な先生方であるに違いない。良い機会であったので、先生方に現在行っておられる住居教育についてアンケート調査を行った。さすが熱心な先生方であるので工夫を凝らして一生懸命に教育を行っておられる様子が分かった。しかし、ほとんどの先生が学生時代は住居を専攻されておられず、住居出身者が家庭科教員になりにくい様子がわかった。また住居教育に苦勞されてお

られる事もよく理解できた。平成8年には本学生活科学部に入学した1年生を対象に高等学校時代にどのような家庭科教育を受けてきたかアンケート調査を行った。本学の生活科学部は平成4年に従来の家政学部を改組したもので従来家庭科教員を多く輩出してきた学部である。生活科学部に改組してからもその伝統は変わらず家庭科の教員となるための教育は行われている。但し住居については教育設備もなく誠に震撼たるものがあるのではあるが。しかしこのような学風をあこがれて入学してきた学生であるので本来家庭科には興味を持っている者が多いと言える。アンケートの結果家庭科教育で住居はあまり熱心には教育されなかったという事が良く理解できた。学生側からのアンケートでも家庭科教員に住居を専攻した先生が極めて少なかった、従って住居教育よりも自分の専攻した食物とか被服の教育に熱が入ってしまうといった事が判明した。普通高等学校の学生が住居や建築について学ぶとすると家庭科教育が唯一の機会である。住居は生活の舞台であり生活の根拠である。国民一人一人が健全な住意識を持ち住宅の改善を行っていかなければいけない時期にきており家庭科教育における住居教育の見直しが必須である。学生からのアンケート結果をみても高等学校での住居教育の充実に熱い期待が寄せられている。

目 次

概 要	1
第1章 高等学校家庭科教育と教科書	3
第2章 家庭科教員に対する住教育に関するアンケート調査	7
第3章 お茶の水女子大学1年生を対象とした家庭科住教育に関するアンケート調査	20
第4章 高等学校学習指導要項（文部省）	28
第5章 高等学校家庭科の教員に関する調査	36